

1998年

緑区民の

戦時体験記録集

(第五集)

名古屋市緑生涯学習センター

目次

はじめに

体験記 終戦後 昭和二十一年初夏

私の体験記

母の戦中戦後

終戦と母

終戦当時の記録

有松捕虜収容所

ほんとうにあったよ 捕虜収容所

報國第五八一三號 「鳴海號」何処へ

戦争を語り継ぐ

空襲

夕焼けの丘

《特別掲載》

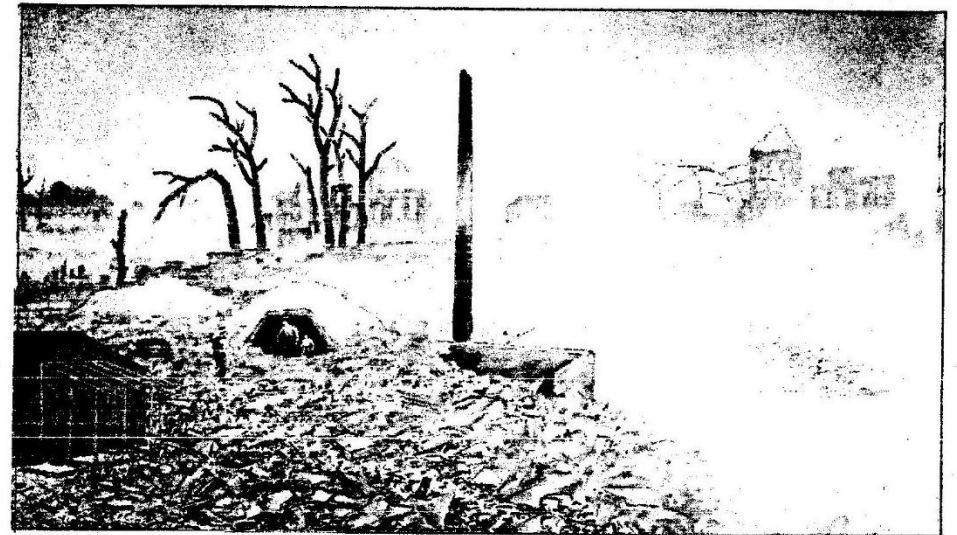
「早く逃げなさい」「ごめんなさい、お母さん」

歌「ごめんなさい お母さん」

編集後記

古澤	井川	竹中	石河	大村	近藤	藤島	藤島	久野	神野	高宮
秋子	啓	美子	孝益	達雄	劔二	繁博	繁博	滝蔵	正人	文恵

二頁	三頁	六頁	八頁	一三頁	一五頁	二十頁	二三頁	二八頁	三一頁	三七頁	四九頁	六九頁	七四頁	七六頁
----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----



「空襲絵巻」3 (久我治平画)

図説 昭和の歴史 8 戦争と国民 より

はじめに

緑生涯学習センターで行ってきた「戦争体験を語り継ぐ集い」は今年で十周年を迎えました。そして、この「戦時体験記録集」も第五集を発行できることになりました。

時の流れの中で風化し、語り部も少なくなっていく中で、あの戦争の記録を残すためには急がなくてはならないと、発行を決意した頃のことを思い出します。

私たちの思いは、戦争を否定し、平和を守り、人を愛して生きたいという共通の願いなのです。戦争を美化したり、利用することを許さず、その愚かで悲惨な現実を学び、ひとりでも多くの人に伝えていくことが大切だと考えます。

今一度、考えようではありませんか。「戦争とは」「平和とは」と。

この記録集が平和を愛する人たちの心の中に残っていくことを信じます。

第十回「戦争体験を語り継ぐ集い」実行委員会

《体験記》 終戦後 昭和二十一年初夏

元従軍看護婦 古澤 秋子

真夜中、元海軍病院の宿舎に「総員起こし」のサイレンが鳴り響く。全員が飛び起きて大急ぎで白衣に着替え、宿舎前に集合しトラックに飛び乗る。何台ものトラックが続く闇の軍用道路を、車のライトを頼りに港目指して突っ走る。港の兵舎には復員兵が担架に乗せられ列をなしている。引き揚げ船の中には故郷を目前にして逝ったお気の毒な兵士がズリと横たわって居る。涙を流している暇もない。歩ける者はトラックに押し上げ、担架の兵士を運び上げて病院へ。

軍服から白衣に着替えさせ、カルテ作成、検温、脈拍、注射と走り廻っているうちに朝が来た。

脱いだよれよれの軍服はシラミの巢。縫い目に添うてギッシリと行列だ。薬物消毒では卵は死なない。幾つものドラム缶に入れて半日がかりで煮沸消毒し、海岸ぞいの松の木に綱を張り、引っ掛けて干す。

中国の虎門からの復員兵は殆どがコレラ菌に侵されている。患者はすぐく水を欲しがるが生水は与えられない。一度沸騰させて、それを冷ましてでない

駄目。

思う様に燃料やガスも無く、大きな火鉢で炭火に薬缶を掛けたり、廻りに並べて沸かすので時間もかかる。ようやく冷やして運んで行くと、手にむしやぶり付いて水を飲む。みんな痩せ細っていて、頬はこけ鼻ばかり高く（コレラ顔）食事の重湯もとれない。リンゲル注射を大腿部へ打つのだが三人がかり。一人が注入、もう一人が入れている所を熱いタオルで揉み散らす。（太い針が刺さっているので患者は痛い）三人目は熱いタオルを絞って渡す。（現在の点滴に似ている）このような努力にもかかわらず、看護の甲斐無く一晩に二、三人は亡くなる。ようやくの思いで内地に辿り着いたと云うのに、肉親にも会う事が出来ず、どんなにか残念だったろうと涙した。

この頃はコレラ患者の引き揚げ者が多く、病院に收容しきれなくなり病院船、引き揚げ船を沖合に停泊させて病院代わりにする。排便は消毒して海に捨てていたが、完全に消毒した筈なのに、漁師さんが採った生かきを食べコレラに感染して死亡者が出た。しかしその原因を知らずに親せき、知人、町内と町中にコレラが広がり大騒動。病院では軽い患者を転院させ、停泊船も増やして町内全員を收容、検査、検査で大混乱。妊婦さんが死亡、お腹の赤ちゃんに迄も感染

染しており哀れだった。

停泊船との連絡の小舟がある日転覆し、同期の看護婦二名が舟の下敷きになり若い命を散らした。帰郷の折りには二人のお墓参りをして御冥福をお祈りした。

合 掌

私は昭和十五年十二月召集され、中支へ、更にシンガポール、スマトラ等へ転戦し、最近話題になったメダンの自動車廠にいました。あの当時は陛下の御為、又、内地の父母や好きな娘のためと、大いに張り切って、安価なヒロイズムに浸っていた時、たまたま特攻隊の募集がありました。「ヨウシ」俺が敵艦に突っ込んでやろうと思い、すぐ中隊長に「自分が特攻隊に志願します」と言いました。

数日過ぎた日に中隊長より「井川は駄目だ」と言ってきましたので、「どうして駄目ですか」と聞けば、「上等兵以上で機械もしくは自動車の運転の出来る者」との事でした。私は中隊長に「今すぐ上等兵にして、特攻隊に行かせて欲しい」と言いましたが、「無理を言うな」と断られました。

その時に思ったのですが、上等兵になれない理由が確かに有りました。それは、その頃の将校の昼食は、将校が一堂に集まって部隊長と共に昼食する事になっておりました。たまたま私が当番に当たっていた時、昼食も過ぎた頃、部

隊長当番に「「アレ」を持って来て皆に分けよ」と、部隊長が言いました。

「アレ」とはなんだろうと、いぶかって、部隊長当番は私にも一緒に来るように言うので一緒に行って探したが、それらしい物がありませんでした。部屋の際に石油缶が置いてあり、それを開けるとキャンディーがいっぱい入っていました。この頃のキャンディーは非常に貴重なもので、部隊長は内地の家族にでも送ろうと思っていた所を、我々に見られてしまったので、大変立腹したようでした。私に向かって「お前はこういう名前だ」と言うので、「ハイ私は井川です」と言ったところ、「よし、名前は良く覚えておく」と言っていました。部隊長が言っていた「アレ」とは、羊羹ただ一本なのでした。一本の羊羹を二十名程の将校にどういうぐあいに分けるのかと思いました。

『人間万事塞翁が馬』ではないが、将校当番の件で上等兵になれなかったので、特攻隊に行かなくてすみ、今の世に生きている様なわけです。

母の戦中戦後

竹中 恵美子

母は明治三十八年生まれで、男三人女三人の子を生み、私は上から二番目である。

戦時中父が大病になり、弟も肺炎にかかって、周囲の人たちの、もう助からないのでは、の声にもめげず、必死に看病していた。当時、鳴海本町にあった診療所（現在の緑生涯学習センター横）の若い先生に、往診を依頼した。すると、先生自身がマラリアで高熱なのに、自転車でも何度も往診してもらうことができた。

薬もすでに民間では難しくなり、治療費すら満足に払えなかったが、命を取り留めたのは、先生のお陰と言うしかない。

衣料も自由に買えなくなり、母は自分の着物、帯を解いては薄暗い電灯の下で、私たちの洋服を縫ってくれたのを覚えている。

この頃は、魚と言えば、鯖、秋刀魚、鰯などであった。その魚を子供たちが食べている間、母は待っているので、心配した妹が

「かあちゃん、ご飯を食べないの」

聞けば、今はお腹空いてないからと、子供たちには、充分食べさせてくれた。いつも、残り物の母は、秋刀魚、鰯の骨をよく噛んで食べると美味しいと言っていた。鯖の煮付けの頭や骨にお湯をかけた汁を、おかず代わりにしなければ、大勢の家族が食べていくのは難しかったのである。

すでに、衣料、食糧など、日常生活の殆どが配給制で、米は勿論、砂糖、塩も一日何グラムの割当であった。砂糖は無くても辛抱できたが、塩がなければ生きていられないので、知人に砂糖を塩に交換してもらったと、母から聞いた記憶がある。

主食に麦ご飯が食べられたら幸せであった。薩摩芋を大きな釜に山程入れて、蓋ができないので、すり鉢を逆様に被せて蒸し、主食の代用としていた。

そんな物すら、両親の衣類と交換してのことである。カボチャもよく食べた。家の裏の近くは水田や小川で、兄妹たちと、ザリガニや、たにしをとったり、畔道のせりを摘んで茹でて食べていた。

緑区青山でのことも、思い出として残っている。諏訪神社の東側、国道一号线の片側は日本車輦で、反対側は水田ばかりであった。秋、稲が実ると、蝗が

稻穂に群れて、朝露のあるうちに、兄妹で捕りに行った。母に教えてもらって、市の袋の口に十センチ程の竹筒を入れてしぼり、その竹筒から蝗を押し込んだ。面白いほど捕れる。

袋のまま一晩おいて、湯をサーとかけ、ホー口鍋で空炒りして、味をつけるだけであつた。蛋白質をこの蝗で取っていたのである。

燃料は、ガス、灯油などもなく、里山へ行き（今の大高緑地公園）、松葉や木の枝等を拾いに、兄妹と、近所の友達と一緒に行くのが、私たちの仕事になっていた。

私が十一歳頃、疲れたり、冷えると、右の足首が腫れて痛みだした。病院で検査したが原因が分からない。しかし、痛みは治らずその度に、母は着物を質屋へ持ち込んで、病院へ連れて行ってくれた。質屋への意味を知り、私は病院を拒んだ。辛かつたのである。

健康ならなんでも出来るから、どんなことをしても治療しなさいと、母は医療費を都合してくれた。その愛情は終生忘れられない。

終戦後何年かして、世情も落ち着き、菓子が出はじめると、母が西区新道の菓子屋で小麦粉の注文をとってきた。一袋三十キロの袋をリヤカーに山程積み、

緑区から西区まで一人で引いて納品していた。

道路の悪いところだけ、草履をはき、あとは裸足で歩き、夏は足の裏が熱くて堪らなかつたと、母から後日聞いた。それより、一度夕立と雷の中を、天白から北浦まで家並みがなく、びしょ濡れになつたまま、歩いてきた時は怖かつたと語っていた。

私は足が悪くて、母の商売を手伝えなかつたが、家で母親代わりとして、妹弟の子守りと夕食の仕度で、帰りを待っていた。

三十八歳で自動車運転免許を取得して、初めて母が西区まで歩いた道を運転した。二十キロ以上走って到着した時は、神経を磨り減らした様な疲れであつた。

重い荷物を積んだりリヤカーを引いた、母の逞しい気力は、家族が生き延びるための、一念であつたと思つている。

生前、母にこのリヤカーを記念として貰つたのは、“家族が健康で幸せであるように”と、家の庭に今も置いている。

父は七十七歳、母は八十六歳で他界した。母の葬儀のあと母の姪が、「叔母さんは幸せな家庭で育ち、村で数人しかない高等女学校に進学した才女で、行

動力のある方だった。戦争のため随分苦労されながら、子供さんをきちんと育てられ、最近では見られない立派な葬式を出してもらった。」と言ってくれた。母が私たちの学生時代に、財産はいくらあっても、何かのきっかけで失うことはあるが、学問で覚えたものは、生涯失うことはない、聴かされた言葉は今も残っている。

私は母の一生を考えると、貧しい生活であつても、暖かい家庭を守ることが、どんなに大切かを教えられた想いである。

戦争は、母をより苦難の道に歩ませたが、犠牲はまず女や子供となるだけに、若い世代に、再び、戦争をしてはならないと告げたい。

(平成十年四月)

終戦と母

いしこ たかえ
石河 孝益

昭和二十年八月十五日、私は小学校一年生だった。父は六年前病没し、母は二十八歳の長兄を頭に七人の子供を育てながら、家、山林、田畑を守っていた。その日は朝から隣り近所へ伝言事で走り廻っていた。持ち廻りの組長だったようだ。女学校一年の姉が庭で採れた胡瓜で酢揉みを作り、朝の残りの味噌汁と沢庵で、早い昼食だった。夏の昼は殆ど毎日、同じメニューである。

正午に大勢の組員で、我が家の南座敷はいっぱいである。障子を取り外した簾越しの居間から、感度の悪いラジオを聞いた。

近所の人たちの異様な表情が気になった。この時が、終戦を告げる陛下の録音放送であつたが、私にはすぐ理解できないのである。

二学期が始まり、鈴鹿の里に涼風が吹く頃、二男、三男の兄は各内地から帰った。目ばかり鋭く、痩せていたが元気である。海軍兵学校(防府)から帰った兄が、白い網袋を十個程かついできた。珍しい乾パンが詰まっていた。母はその一部を、離れや蔵に街からきている疎開の人たちへ分けてあげた。私たち

姉妹には、収納缶から何日かに分けて、3個づつ数をして与えてくれた。ほとんど味なしの固いビスケットだが、大変気に入っていた。

冬が過ぎ、二年生に進級して昭和二十一年六月二十一日、梅雨時の薄ら寒い日であった。学校から帰宅すると、目を赤く腫らし、火鉢に身を被せ、悲愴な顔の母を見つけた。長兄、孝雄の戦死公報を受け取った日のことである。

二日後、村中の人々も参列して野辺の送り式をした。遺骨は、南国ビルマの乾いた砂だけである。一五一連隊で、インパール作戦に出征したのは、昭和十九年三月であるが、その年の六月に熱病死していたことが解った。

仏壇には、兄の毛髪が納められてあった。生前の母は、テレビの戦争映画や記録報道があると、息子の顔でも捜すように見入っていたのを思い出す。

昨年末、伊勢市の人の「一五一連隊の会」の記事を見た。八十歳のご高齢ながら、その会報づくりで精魂尽くされた方に、チャンスに恵まれ、連絡がとれた。兄の最後を詳しく知りたい。六月には護国神社（津市）の参拝を兼ねて、お会いできる。来年六月、母の十三回忌にこの結果を報告したい。

戦争は勝敗に関わらず、人々を不幸にする。今日の恵まれた日常に感謝し、今後悲しい過ちの無いように後世に伝えなければ、本当の平和は望めないと確信する。

平成十年五月二十日

終戦当時の記録

大村 達雄

私はその頃、旧制中学の三年生で、東亜合成の工場へ動員されていました。名鉄電車で常滑線の柴田駅迄通っていましたが、遅刻しそうな時は、満員電車の手摺りにぶら下がってカーブで振り落とされそうになったこともあります。

昭和二十年五月十三日（日） 日記をつけ始めた日

今日は工場が休みのため朝寝ぼうしてしまふ。午前中裏の縁側で勉強した。天気が好き庭の緑が一段ときれいに見えた。夜は近藤さんに幻灯写真を見せてもらう。

◎今のスライドのことを幻灯写真と言っていたが、その頃は大変珍しかった。近藤さんは親爺の親戚に当たる人で、大須で写真屋をしていたが、空襲で家を焼かれ家族四人が私の家に同居していた。戦災で焼け出されると、どうしても着の身着のまま、身内や知り合いの家に、厄介にならなければならなかった。

五月十四日（月） 名古屋城焼失

朝ゲートルを巻いて、家を出ようとしたら警報が入り、やがて敵飛行機の編

隊により、北区一面に焼夷弾が落とされ名古屋城も焼失してしまった。天守閣は物凄い火柱となって長時間燃えていたようである。

◎尾張名古屋のシンボルが、終戦間近に失われたことは誠に残念に思う。

五月十七日（木） 我が家の倉庫焼ける

夜の明けない午前三時頃、母に起こされたが警報のサイレンが鳴り終わっていたので一瞬ぼんやりしていた。父と母は一所懸命、家具や衣類の缶を裏庭の空地に持ち出していた。その後間もなく、敵機が来襲し数発の照明弾と、たくさん焼夷弾が落とされ、周囲は真昼のように明るく、空は一面に火の海となった。

幸い家には落とされなかったが、少し離れた扇川の川端の倉庫に落ち、近所の人の知らせですつ飛んで行った。既に屋根から凄い煙が出ていて手のつけようがなかった。暫くして、警防団の人達により、手押しポンプで川の水を放水し、消火に当たったが、中には俵に詰められた炭が一杯入っていたので大変だった。

◎一旦消えたようでも、あとから、又、ブスブスと燃え出し、勿論灯火管制が特にやかましかったので、私も二晩程徹夜で火の番をした。私の家は父が薪

炭商をしており、子供の頃薪炭、石炭はよく船で運ばれていた。そのため川端に倉庫があった。

七月十日（火） 東海軍特別建設隊へ派遣

朝礼で先生から、動員先が東海軍特別建設隊に変わることが知らされ皆びっくりした。

◎建設隊は中村国民学校に置かれていた。

七月十三日（金） 建設隊へ入隊

八時に中村国民学校に集合し、荷物を教室に納め、早速中村公園へ行き開墾の農作業をした。慣れない仕事のため大変疲れた。夕食はジャガ芋と、塩汁だけしか無かった。夜は点呼があり、毛布を一枚ずつもらって教室で寝た。

七月十八日（水） 防空壕の建設

今日からの作業は、名古屋駅に造られていた防空壕の建設であった。貨車から砂利、砂、セメントを下ろし、トロツコでミキサー（コンクリートを練る機械）迄運ぶ仕事だった。炎天下の重労働で大変だった。

六時に起床し、朝礼を済ませ、中村国民学校から名古屋駅迄、軍歌を歌いながら整列して歩き八時に仕事を始めた。当時、名古屋駅の屋上には機関砲が

数門配備されており、空襲が入ると敵機に向けて発砲していた。又、駅構内の出入り口には爆風よけの土のうが高く積み、昼でも中は薄暗かった。夜の点呼が終わると、家の近いものはこっそりと食糧を取りに抜け出した。勿論、朝迄に学校へ歩いて戻らなければならない。食べるものと言つても、大豆を煎つたものくらいで、それも食べ過ぎると下痢を起こし、満腹感を味わうことは出来なかった。

八月十五日（水） 終戦 市電の車掌

市電の車掌をやることになったと、先生から言われ一時騒然となった。しかし、皆納得して午後、西町車庫へ行き早速車掌の教習を受けた。

◎教習場では三日間、一通りのことを教わり、ポール（集電装置：現在のパタグラフに相当する）の扱い方等、実技の講習もあった。最終日は勤務地の車庫を決められ、私は高辻の車庫になった。慣れる迄は色々失敗もあった。一番苦労したことは、雨の日に交差点でポールを進行方面の架線にはめ換えることだった。うっかり忘れるとポールがはずれ、ばねが強いので線を切つてしまうこともあった。車掌の動員は、十月十五日で終わり、翌日から本来の学生生活に戻り授業を受けることになった。

考えてみると、今では想像できない色々な経験をしましたが、その頃は余り嫌だと思つていませんでした。それは戦時教育を受け、「勝つ迄は」の精神をたたき込まれていたためだと思います。五十数年経った今、私も子供や孫達に囲まれ、人並みの生活をしていますが、決して二度と戦争は起こしてならないことを、次の世代に伝えていくことが大切なことだと思つています。そう言う意味でも委員の方々の一層のご活躍を期待しています。

戦争のない平和な暮らしが、すでに五十余年続いている。このことが如何に素晴らしいことか、戦争を体験している人間には身にしみて有難いことと感じる。

私は年齢的に兵隊には行かず、且つ戦地へも行っていないので、自分の意志に反して、人を殺したり、傷つけたりもせず、心おだやかな人生を送ってこれたのは幸いなことである。

戦争末期、昭和十九年当時、名鉄本線有松駅北側の丘陵地の中に捕虜收容所があつた。ここにはイギリス連邦軍の捕虜達が二百名ほど、收容されていたと聞いている。しかし收容所のことは戦時中でもあり、詳細は不明である。

これらの捕虜達は、毎朝私の家の前をぞろぞろと隊列を組んで、近くの日本車輛鳴海工場へ向かう異様な一団となつて、今日一日の強制労働の場へと足を運んでいるのである。しかし、捕虜は捕虜だ。立場が一つ違へば銃で攻撃してくるかもしれないし、現実には彼等の仲間は毎日のように日本各地を空襲し、多くの日本人を殺し、家を焼きつくしているではないか。一人の日本人として目

前にいる捕虜達を見れば、石の一つも投げてやろうと思つても不思議ではない。

捕虜收容所、そこに日夜繰りひろげられる彼等の取り扱いに関して、国際法上の、そして人道上の取り扱い、極限状態におかれた勝者と敗者との葛藤とが、人間の正常な理性が働いていれば救いもあるが、一つ間違えば人間性の一翫醜い部分が出て、悲惨な結果に終わることが多いのである。長い人類の歴史の中で、いつの世でも繰り返されてきたことが、昭和十九・二十年でも行われたようである。

記録によれば、收容所に勤務していた兵隊、軍属の人達の内にも二、三名のC級戦犯者が出て処刑されたと聞く。

昭和二十年八月十五日終戦、日本は連合国に負けた。この日を境にして今迄の立場がすべて逆転して、日本は連合国の支配下におかれた。そして日本の体制が根本的に改革されていったのである。

有松捕虜收容所の上空には、連日のごとくアメリカの飛行機が低空で二、三機飛んで来て、收容所を目標に落下傘で援助物資と思われるものを投下し始めた。おそらく收容所の中にいる、捕虜達に食料や医療品等を慰問の為に投下しているのだろう。遠くから眺めていると今迄に見たこともない、きれいな光景

である。

聞くとところによれば、収容所の外へ落ちた物資を近所の人々が拾いに行ったようだ。その頃の人達から見れば、正に天から宝物が降ってきたようなものであっただろう。

名古屋の中心部へ出れば白人兵、黒人兵達の乗ったジープが我がもの顔で街中を走り、その後を子供達が走って行く。時に彼等は面白がって、チョコレートやチュウインガム等を子供の群れの中へ投げるのである。すると子供達は、我先にそれらのお菓子を拾って歓喜の声を上げる。これが敗戦国の姿である。そして、その後、始まる戦後の食糧不足が私達を襲ってくるのであるが、焦土と化した街並み、職もなく住む家もなく、ただ無気力の一日、一日を送る。正に敗戦国の悲哀を、いやという程思い知らされるのであった。

※ 近藤さんは平成九年度の「第九回戦争体験を語り継ぐ集い」の実行委員として企画・運営に携わっていただきましたが、今年になって体調すぐれず、この手記を書かれてまもなくお亡くなりになりました。
ご冥福をお祈りいたします。

ほんとうにあったよ 捕虜収容所

(愛知郡鳴海町宇有松裏)

藤島 繁博

「番号！」

「イチ」「ニイ」「サン」・・・「シー」「ゴー」「ロク」・・・

「シチ(ヒチ)」「ハチ」「クー」・・・「・・・」・・・

収容所を出た元捕虜の一隊は、踏切を渡りすぐ側の広場に整列し点呼を受けました。昭和十九年から二十年にかけ毎朝見る光景でした。

有松駅へ向かう道は狭く、「陳列館」を右手に見ながら進み、駅舎裏側の専用通路口からホームへ入る。用意された二両編成の電車で神宮前迄行き、熱田区三本松町一丁目一番地の日本車輛製造(株)で一日の労役に励み、夕刻帰所していました。

食糧事情は前線基地への補給が優先で日増しに悪くなり、栄養失調等が原因で亡くなった方々も多数出しました。

戦後もしばらくあった高根山の火葬場へ、普段見る群青色の上下服を着た同僚幾人かに引かれた大八車であったか、リヤカーであったかで葬送されたと聞かされました。

異国で不意な死と遭遇した無言の元捕虜の方々は、母国へ帰り、家族と再会することが出来たのでしょうか。五十年余を経ても確たる情報は知らずにおります。

長かった戦争がやっと終わりました。20ワットの白玉電球に黒い覆いをかけて夜を過ごした「灯火管制」から開放され、暮らしの中にもほんの僅かですが明るさが感じられました。

八月十五日以降静かだった日が続きましたが、突然正午前から飛行機の爆音が西の方から聞こえてきました。低空飛行で機体に書かれた数字・アルファベツトも読み取れるほどでした。真上を東方向へ通過した瞬間、銀色に輝くジュラルミン製の胴体腹部中央が二つに開き、見たこともない虹の七色のような落下傘が幾つも幾つも降ってきました。

収容所への援助・救助物資の投下であつたのです。毎日のように幾度いや幾十度と繰り返されました。

無事収容所を出所された元兵士がどのような心境で故国へ帰還されたのか。

またその経路・手段等は何も知り得ませんでした。

入所した元捕虜の延べ人数はどのくらいであつたか、所属は連合軍であつた

のか、特定の国であつたか、判りませんでした。ごく一般の市井の人らしき人も見かけたと思います。

何年か過ぎ「陳列館」のガラス窓に号外で、東条英機元首相他A級戦犯の極東国際軍事裁判結果が張り出されたのも、ついこの間のように思えてなりません。また、元捕虜を監督した元日本兵にはどんな罰が下つたのでしょうか。

戦争が終わつて一度だけ収容所の施設を見た覚えがあり、高い所から下の方を見る位置にあつたような記憶しか残っておりません。

生還し、まだまだ元気で二十一世紀を迎えようとされる方も多くおられることと思います。

収容所の存在した事実は記憶から消えつつあり、いま着手された都市開発事業で周辺一帯は様変わりしてしまします。

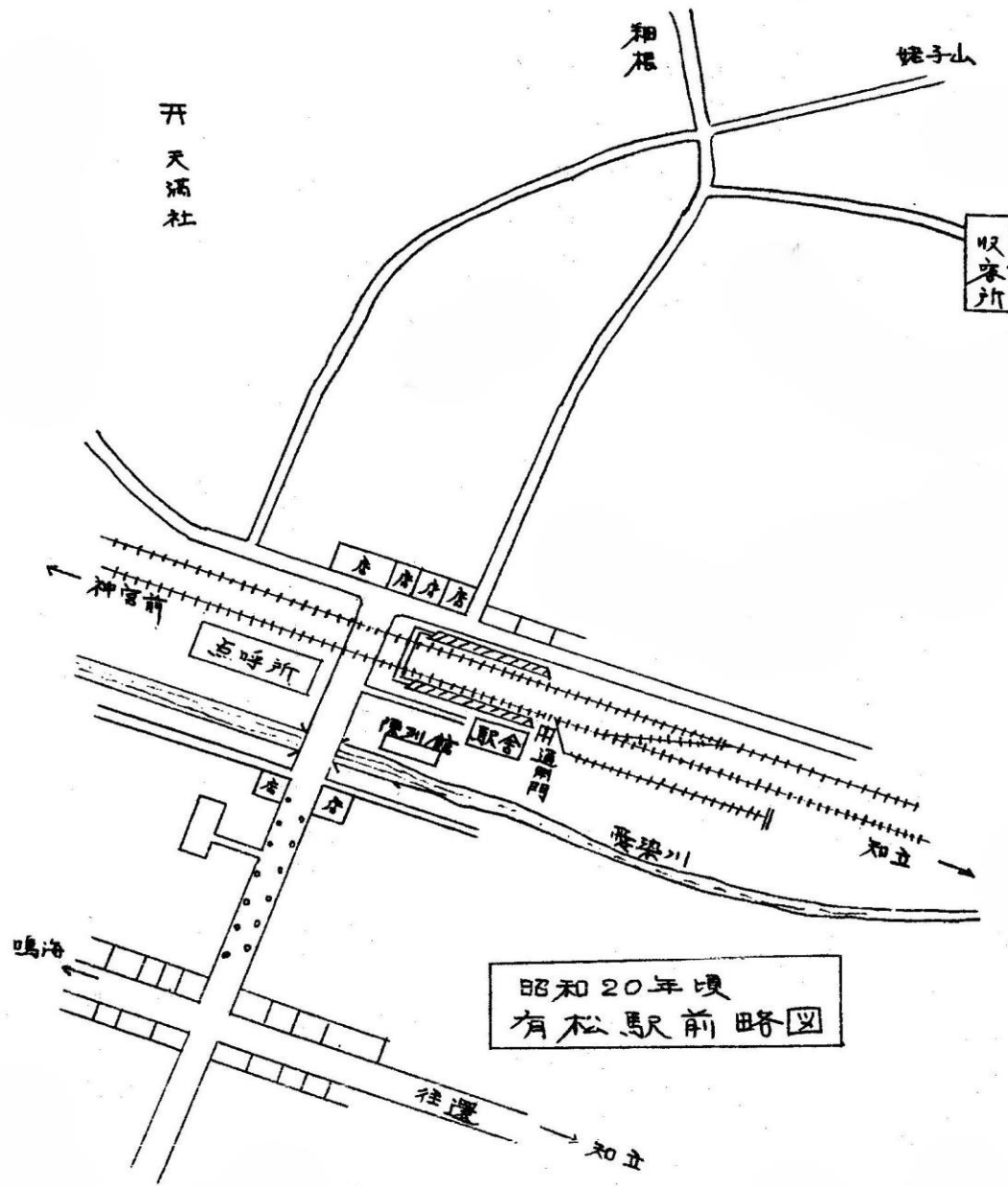
いまなら情報収集も出来て平和維持の輪を更に広げることが可能です。

追記

日本車輛製造（株）に問い合わせしましたところ、空襲で全ての書類が焼失し、記録に残る資料は無いとのことでした。

収容所跡地には同社の社員寮が建っており、静かな住宅地の一角となっています。

何しろ小学一・二年生の時の体験を綴りましたので、事実と相違している部分も多々あるかと思えます。今回の大勢の皆さんから出された情報を参考にさせていただきますと存じます。



太平洋戦争終結の前年末あたりから戦況、国内の情勢ともに暗い方向へと進むことを余儀なくされました。

日常生活も配給制度の本格的実施、兵器製造のため金属、貴金属類の供出が強制的に行われることもたびたびでした。

その頃、国民学校一年生の私達は分校へ通学していましたが、毎月八日は鳴海の本校大講堂に集合し『教育勅語』を校長先生から聞きました。

昭和十九年の愛知郡鳴海町は県下でも有数の町で人口で一七〇〇〇余名ほどあったようです。

戦局厳しいなか、町民がなけなしの金を拠出し、「報國」第五八一三号（鳴海號）艦上戦闘機を国へ献上しました。海軍省の配属で、特攻隊のどなたかが搭乗され戦地へと出陣されました。

過日、悲運の名投手プロ野球名古屋軍のエース石丸進一さんの、ほんとうに短い生涯を描いた「人間の翼」の試写会を観る機会がありました。名古屋軍で

大活躍した後、召集で海軍に入隊、神風特別攻撃隊となり、昭和二十年五月鹿屋基地から出撃し戦死されました。

同じように「鳴海號」を操縦された特攻隊の青年は何処から発たれ、何処で所期の目的を果たされたことでしょうか。志半ばで戦場へ赴かれた時の心境は如何であったでしょうか。

沖縄の地上戦、前線での壊滅的敗北、広島、長崎での原爆投下で八月十五日戦争は終結となりました。

この年、鳴海町の人口は外地からの復員、引き揚げが始まり一九〇〇〇余名と増加し、「緑区」誕生の基礎を築くこととなりました。

大きな犠牲と損害を与え、受け

大きな国民の人生目標を断ち

大きな信頼、信用を他国から失い

長い間かけて償いをして根本から解決するものではありません。戦争は絶対にしてはならないものです。

この「平和の時代」を見つめ、永遠にみんなでしっかりと支えてまいりましょう。

(注) 「報國」は海軍省へ提供されたもので主に民間、市町村民の拠出金によって昭和七年あたりから十九年頃にかけて千七百〇千八百機が製造され、機種も幾多あったようです。

「鳴海號」について詳しいことをご存知の方は是非お知らせください。

戦争を語り継ぐ

久野 滝蔵

先日のNHKによりますと、昭和二十年三月十日(一九四四年)は忘れることのできない米軍による東京都大空襲のあった日だったそうです。その時、東京都では十万人を越す死者と四十万人を越える負傷者が出たそうです。

爆撃機B29が編隊を組んで東京都に爆弾を落とした時、日本側が受けた人的被害についてのみの報告ですが、仮に米機を三百機編隊とした場合、一機の搭乗員を七名とし、約二千百名の米兵が東京都の住民を五十万人以上、一人当たり二百四十人余りを殺傷した事になります。

戦争とは何と恐ろしいことではありませんか。そしてこの多数の日本人の被害者の中に、自ら戦争を望んでいた人が何人いたでしょうか。恐らくほとんどの人は、何も知らずにいたのではないのでしょうか。皆無と言ってもいいでしょう。当時の我々はいつの間にか、この恐ろしい戦争に巻き込まれていたのです。

これとは別に、私の場合は一枚の赤紙(召集令状)によって、何もわからぬまま、ひたすら忠君愛国のためだ、日本の同胞を守るためだと思い込んで、な

つかしい故国を離れました。大切な家族や家業を捨てて、戦場に向かった若者も、幾百万人とありました。

私にとってこの中国での三年四ヶ月というものは、本当に、時々刻々生命の危険に脅かされる苦難と苦闘の連続でした。十一回もの大戦に参加し、自分の足だけで歩き通した距離は、およそ七万キロを越えます。更に、戦場となれば本当にこの世乍らの地獄を見る様なものです。雨、霰の如く飛び交う双方の銃弾の中で、家を焼かれ、燃え盛る炎の中から、逃げ遅れた女性や子供の「哎呀、哎呀」とたまぎるような悲鳴をあげて叫ぶ声。累々と折り重なって倒れている敵兵の屍体。そして、鼻を突くようなその悪臭。今思い出すだけでも、胸が詰まります。

しかし、私は昭和十八年の九月、あの忌まわしい戦場を後に、僅かな負傷だけで無事日本に帰ってくる事ができました。本当に幸運であり、神の加護があったからこそと喜んでいます。

しかし、よく考えてみますと、私たちが日本の国の為であると思って、彼ら地で行ったこととは一体何であったのだろう。何故、中国の人々に、あれ程の大きな迷惑を掛けなければいけなかったろう。

これは、明らかに大きな間違いを犯してしまったものと気が付きました。それなら、私は今後、命のある限り力の続く限り、この償いを続けさせてもらわねばならぬと心の中で固く誓いを立てました。

では、今回の第二次世界大戦とはどんな経緯の下に始まったものでしょう。ちょうどその前後の頃、ヨーロッパの方では、ドイツのヒトラー、イタリアのムッソリーニ等という過激な指導者が現れ、他国を武力で侵略し、自国の領土としていきました。日本の国内でも軍部が政権を握り、国を挙げて戦時体制となっていました。当然、大多数の国民の正論などは全く無視されてしまった状態になり、これでは国民の本当の総意など伝わるはずがありません。

昭和二十年八月十五日、忘れようとしても忘れることのできない、あの悲しい敗戦記念日を迎えなければなりません。都会は廃墟と化し、飢えた人々は街に溢れんばかり。生産のあてもなく、食糧の調達など全く見通しもなく、すき腹を抱えて右往左往するばかりでした。これが一億火の玉になって戦った戦争の結末でした。

私もただ啞然としているだけでは何ともなりませんので、鳴海東部の八ツ松の山林に入り、もう一度戦場に出たつもりで、必死になって開墾の鋏を振るい

ました。

昭和四十七年（一九七二年）、日本の田中首相が中国の北京で周恩来首相と講和条約を結び、再び日中の国交が回復しました。私はその翌年、かねての念願の日中貿易を始めるために新しく商社を設立し、傍ら中国よりの第一回目の留学生をお世話することになりました。それ以来、留学生のお世話は今日まで続いています。また、現在も中国で有名な国立大学の教師等に、私が日本語を教えています。

あの忌まわしい日中戦争についても、彼ら留学生はそれ程深い恨みを持って
いる様子ではなく、淡々として日中交流を喜んでいるようでした。その間、二十五・六年の月日が経ち、五十人余りの人々と温かい心の交流を結ぶことができました。留学が終わった後もなお日本に残って、国内の有名な企業に就職し、現在では中堅幹部になり、それぞれの持ち場で実力を発揮している方がたくさん居られます。また、中国に帰った人々の中には、すでに中国社会で頭角を現した呉成さんのように、山東省青島の市長になられた人もあります。私も先年青島市からの招待に預かり、盛大な感謝の宴を開いて頂きました。

平和とは斯くも良いものであり、貴いものであることをつくづくかみしめて

いる今日この頃であります。数えてみれば第二次世界大戦が終わってから、もう五十三年もの長い年月が流れ去っていきました。そして現代の文明社会は、当時のものとは比べものにならないぬ進歩と変化を遂げており、これからも更に大きく進歩していくことでしょう。交通手段に、通信手段に、生活の便宜に全くうれしいことです。

しかし、私たちが油断してはならないことは、いつ、いかなる時に、前回の様な扇動者が現れ、我々が知らぬ間に戦争に引き込まれるようになるかも知れません。もし、万一前回のような轍を再び踏むことになったら、被害は前回と比べものにならないでしょう。恐らく、人類の死滅につながるかもしれません。

近頃のニュースの中には、核の軍備競争がひそやかに各国の間で行われているようです。確かに大国には大国の言い分もあるでしょうが、小国には小国の事情もあるはずです。世界で唯一の核爆弾による大災害を受けた日本です。この際、感情に流されることなく、強権に媚びることなく、扇動者のおだてにの乗せられないよう、正しい大衆の叡知を集めて、誤りのない方向に世論を集めていこうではありませんか。

青い星。幸福を乗せた緑の地球を、今こそ我々は次の世代の人々に、無事渡

することができるよう、守り通していこうではありませんか。これこそ、前大戦の悲惨を身をもって味わった我々の最も大きな責任であり、最大の目標でなければならぬと考えています。

空襲

神野正人

○大本営発表（昭和二十年三月十日十二時）
本三月十日零時過ヨリ二時四十分ノ間B29約百三十機主力ヲ以テ帝都ニ來襲市街地ヲ盲爆セリ
右盲爆ニヨリ都内各所ニ火災ヲ生ジタルモ宮内省主馬寮八二時三十五分其ノ地八八時頃迄二鎮火セリ
現在迄ニ判明セル戦果次ノ如シ
撃墜 十五機 損害ヲ与ヘタルモノ 約五十機

○大本営発表（昭和二十年三月十二日十六時三十分）
本三月十二日零時過ヨリ三時二十分ノ間B29約百三十機主力ヲ以テ名古屋市ニ來襲市街地ヲ盲爆セリ、右盲爆ニヨリ熱田神宮ニ火災ヲ生ジタルモ本宮、別宮等八御安泰ナリ、市内各所ニ発生セル火災八十時頃迄二概ネ鎮火セリ
現在迄ニ判明セル戦果次ノ如シ
撃墜 二十二機 損害ヲ与ヘタルモノ 約六十機

○大本營発表（昭和二十年三月十四日十二時）
昨三月十三日二十三時三十分頃ヨリ約三時間二
亘りB29約九十機大阪地区ニ來襲、雲上ヨリ盲
爆セリ
右盲爆ニ依り市街地各所ニ被害ヲ生ゼルモ、火
災ノ大部八本十四日九時三十分頃マデニ鎮火セ
リ
我制空部隊ノ邀撃ニ依り來襲敵機ノ相当数ヲ撃
墜セルモ、其ノ細部八目下調査中ナリ
○大本營発表（昭和二十年三月十四日十六時三十分）
昨三月十三日夜半ヨリ本十四日未明二亘り大阪
地区ニ來襲セル敵機ノ邀撃戦果次ノ如シ
撃墜十一機、損害ヲ与ヘタルモノ約六十機

○大本營発表（昭和二十年四月十六日十六時）
昨四月十五日二十二時三十分頃ヨリ約二時間三
十分二亘りB29二百機主トシテ京浜西南部ニ來
襲セリ
右ノ無差別爆撃ニ依り市街地ニ相当ノ火災發生
セルモ十六日五時頃迄ニ概ネ鎮火セリ
我制空部隊ノ収メタル戦果中現在マデニ判明セ
ルモノ次ノ如シ
撃墜 五十五機 損害ヲ与ヘタルモノ 五十機
以上

○大本營発表（昭和二十年五月二十六日十六時三十分）
南方基地ノ敵B29約二百五十機ハ昨五月二十五
日二十二時三十分頃ヨリ約二時間半二亘り主ト
シテ帝都市街地ニ対シ焼夷弾ニヨル無差別爆撃
ヲ実施セリ
右ニヨリ宮城内表宮殿其ノ他並ニ大宮御所炎上
セリ
都内各所ニ相当ノ被害ヲ生ジタルモ火災ハ拂曉
迄ニ概ネ鎮火セリ
我制空部隊ノ邀撃戦果中判明セルモノ 撃墜四
十七機ノ外相当機数ニ損害ヲ与ヘタリ
○宮内省発表（昭和二十年五月二十六日午前五時）
昨夜來ノ來襲ニヨリ宮城及ビ大宮御所ニ被害ア
リタリ、三陛下及ビ賢所ハ御安泰ニ亘ラセラレ
ル

○東海軍管区司令部発表（昭和二十
年六月二十日十二時）

マリアナ基地ノ敵B29約二百機ノ中
約九十機ハ本六月二十日零時四十分
頃ヨリ逐次志摩半島ニ侵入シ瀝美灣
北部ヲ經テ豊橋市附近ニ焼夷攻撃ヲ
行ヒタル後、概ネ三時スギ頃マデニ
浜松附近ヨリ南方ニ脱去、マタ概ネ

同時刻爾余ノ約百十機ハ伊豆半島南
岸オヨビ駿河湾口ヲ經テ逐次静岡市
附近ヲ焼夷攻撃シタル後、御前崎附
近ヨリ南方ニ脱去、コレガタメ静岡
オヨビ豊橋市内各所ニ火災發生シタ
ルモ静岡ハ概ネ五時頃、豊橋ハ概ネ
八時頃ソレゾレ鎮火セリ、本空襲ニ
ヨル両市ノ被害ナラビニ邀撃戦果ニ
関シテハ調査中ナリ

○西部軍管区司令部発表（昭和二十
年七月二日十時）

一、マリアナ基地ノB29約百機ハ七
月一日二十三時五十分頃ヨリ約一時
間半ニワタリソノ主力約六十機ヲモ
ツテ天草方面ヨリ熊本市ニ侵入、同
市ヲ波状的ニ焼夷弾攻撃セリ、マタ
他ノ一群ハ豊後水道ヨリ侵入シソノ

約十機ハ零時頃ヨリ約一時間ニワタ
リ周防灘ニ機雷投下ヲ、約三十機ハ
零時二十分頃ヨリ一時間ニワタリ主
トシテ関門両市ヲ一部ハ延岡市ヲ焼
夷攻撃セリ
二、熊本市、門司市、下関市、延岡
市内ニ火災發生セルモ五時頃マデニ
ソノ大部ハ鎮火セリ
我重要施設ノ損害ハ極メテ輕微ナリ

○東部軍管区司令部発表（昭和二十
年七月七日十一時）

一、B29約二百機ハ六日二十三時三
十分ヨリ七日三時三十分ニ亘ル間、
四梯団二分レ、管区内中小都市二分
散來襲シ、主トシテ、焼夷弾攻撃ヲ
実施セリ

二、甲府、千葉ノ両市ハ敵焼夷弾攻
撃ニヨリ火災發生ヲ見タルモ七日拂
曉マデニ概ネ鎮火セリ、ソノ他二、
三ノ小都市ニ対シ焼夷弾投下アリタ
ルモ損害極メテ輕微ナリ
三、管区内中小都市ノ攻撃ハ今回ガ
最初ニシテ爾後コノ種分散來襲ニ対
シテ警戒ノ要アリ

B29による日本本土への爆撃が、軍施設や軍需工場から、昭和十九年末には
都市への夜間焼夷弾攻撃となってくる。

（B17からさらに航続距離の延びたB29の完成と、マリアナ諸島の米軍占領
により、ここを基地として日本攻撃が一変した）

昭和二十年には、東京圈、名古屋圈、関西圈など、大都市へ数百のB29が連
日のように夜間攻撃を繰り返して、大都市が廃墟と化すと、次は地方都市に矛
先を向け始めた。

海の向うにあった戦場が、日本の内地のすべてに及んできたのである。戦場
でなかった庶民の街が、昼は戦闘機、夜はB29の攻撃で、もっとも苛烈な戦場
になった。

昭和二十年三月十日、東京では深夜三時間足らずの空襲により、死者八万八千七百人、負傷者十一万三千人。この数字は、広島、長崎の被害者と変りないのである。

○大本營発表（昭和二十年八月七日十五時三十分）

- 一、昨八月六日廣島市ハ敵B29少数機ノ攻撃ニヨリ相当ノ被害ヲ生ジタリ
- 二、敵ハ右攻撃ニ新型爆弾ヲ使用セルモノノ如キモ詳細目下調査中ナリ



敗戦を前に、最後に突き付けられた原爆投下も、日本人にはこの程度の情報しか知らされなかったのである。

何か異常な気配を感じて、目覚めると警戒警報の発令であった。

連日の空襲で衣服をつけたままなので、暗闇のなか上衣に袖を通し、雨戸を開け、ラジオのスイッチを入れる。隣に寝ていた古川も、やれやれと呟き床から出てきた。昨夜、古川が故郷から米を持ってきて、久方振りに白米を炊いた。それだけに満腹感で、今夜ぐらいくつすり眠っていたかった。

六秒吹鳴、三秒休止。この繰り返しを、十回の空襲警報発令のサイレンが鳴りだす。どれだけ聞いても、馴れることのなかった音であった。ラジオはB29の主力が、名古屋方面に向かってしていると報じている。この頃には、日本軍の迎撃体制の裏をかき、B29の編隊は本土に接近すると、単機ごとに千メートルから三千メートルの低空で、侵入するようになっていた。

鈍い爆音がひびき、照明弾が投下され、真昼のように辺りが明るくなる。突然、近くで高射機関銃の鋭い音がつんざく。空を見上げると、明るい空を突き抜けたサーチライトがB29の機影を捕らえている。あちこちで炎があがりだした。爆音、銃声、サイレンと複雑に混じりあい、それに、人声まで異常な様相を呈して、多数の人たちが慌ただしく駆け出し、警察官、警防団員が大声で避難を叫んでいる。

先日の東京空襲では、外側に焼夷弾を投下して逃げ道を塞いで、順に内側を焼いていったと聞いていた。今夜の名古屋も、この手順のように思える。こちららは身軽なだけに、古川と避難しようと表に出たら、隣組の人たちが立っていた。順ちゃんの説明では、安井さんが家財道具すべてそのままなので、助けてほしいとのことだった。

安井家は、二階家の一階に、旋盤等の機械を置いて軍需工場の下請けで、子供のいない五十代の夫婦。順ちゃんの家は、母や弟妹は疎開して、技術屋の父と二人、順ちゃんは女子専門学校生だ。西隣りの中村家は柴に店のある旧家で、六十代の番頭さん夫妻が管理している。他の家は避難したのか顔はなかった。

順ちゃんの父は、両隣の人が残られるのに私たちだけ避難できないと、古川と私は意志表示していないのに、残留と決められてしまう。中村家の番頭さんも留居を預かっていて焼けないうちには逃げられないとかで、順ちゃんに避難をすすめると、大和撫子ですの返事。戦時中の女性は健気であった。

気掛かりなのは中村家である。大邸宅なので火がつけば、手のうちようがない。しかし、事態は切迫していて、迷っている時間もなく八人で分担することにする。家の前は百五十坪程の広場で、そこには十メートル四方に深さ五メー

トルの地下貯水槽があった。防火倉庫の二人で押すポンプを引っ張りだし、備えるしかない。

斜め南側の長屋から道路に、数十個の焼夷弾が火の塊となって落ちてきた。炎が地上を走りだし、男性は手押しポンプで、女性は防火用水からバケツで、水をたたきつけた。長屋の炎はどんどん拡がって、焦げ臭い風が漂いだした。

安井さんの家に落ちたとの声に、私はホースの筒先を抱えて走った。母屋と便所の境に、焼夷弾が三本突き刺さり、炎上している。消火中、裏の木工所が火を吹きあげた。筒先を交替して貰い、道路に出ると、貯水槽横の家が燃えている。熱風のなか火の粉が舞い、順ちゃんがポンプを押している人に水を掛けていた。

急遽、二階に上がって北を見ると、すべて火の海である。対流作用によって火と熱は上とか横だけでなく、下からも吹き上げてきた。炎の切れ間に、B29が二メートル程の巨体を見せて飛行している。想像を超えた量の焼夷弾が、地上にたたき込まれているのだ。激しく風が流れ、炎は嵐の海のように大きく揺れ、その度に屋根が崩れていく。

木工所の製材された板が、乾燥のために整然と積み重ねられて、これに火が

付けば、この家は焼失するしかない。土間にあるとびぐちを持つて、木工所との境にある板塀を叩き割った。板の隙間から異様な臭いが襲う。すでに板材は燃えだして、とびぐちで上から順に一枚一枚押し倒した。爆音のなかから、いつ焼夷弾が頭上に落ちてくるか、不安に怯えながら作業を続けた。いつしか怖さが失せてしまう。渦中に入ってしまったと、人間はもう怖れはなくなるものである。

古川と順ちゃんが、とびぐちを手に応援に来てくれた。二重三重と横に並んでいて、中々押し倒せない。倒した板に火が通っている。ポンプの水が、ここに間に合い、何とか危機を乗り越える。中村さんの門に落ちた何発かの焼夷弾は簡単に消火できた。

すべての音が凝縮された重いひびきに包まれて、男性は手押しポンプを無意識に押ししていた。中村さん宅の西に豪邸が二件あって、もしその邸宅が炎上すれば、逃げ道はない。燃えないこと、そんな僥幸を願うしかない。ニュースのなかで見た、戦火の下で逃げ惑う、難民の姿と重なり合う。この八人が焼死しても話題になることもなく、過ぎ去っていくに違いないのだ。

長い夜が明ける。見渡す限り瓦礫が続き、白い煙を上げて、くすぶっている

だけであつた。浅い春の季節のなか、生暖かい風が吹いていた。一夜で街が消失してしまう。

とにかく済んだ。全員無事であつた。脱力感で座り込んでいたら、女性たちが握り飯を運んでくれる。むなしさの想いで食べていると、防空ずきんのなかに煤けた順ちゃんの笑顔が眩しい。

この凄烈な戦場で焼死した人たちは、戦死者ではなかった。単に焼け跡として、記録してほしくはない。

※ 戦争に反対する声はなかったのかと、若い人たちから聞くことがある。短波放送を受信するだけでスパイとして検挙された時代であり、現在の情報過多のなかでは想像もできない世界であつたのを知ってほしい。

昭和二十年八月上旬のラジオ放送番組を紹介したい。

ラジオ放送番組

昭和20年8月

8月1日 水曜

- 後 0.15 華曲「青柳」宮崎春井、宮崎富実代
- 4.00 長唄「瓜哇」吉住小三雄外
- 6.00 音楽教室「音楽のきき方」(1)下地晴一
師・下村雨人
- 6.45 国民合唱「早起きお日様」
- 7.00 報道
管弦楽「小夜曲」マーチアルト作曲東管
特設機を廻る早宣通(録音)
物語「英三四郎」徳川夢声

8月2日 木曜

- 後 0.15 軽音楽・長内平風琴楽団
- 4.00 落語「藤流島」古今亭今輔
怪談・放送怪談研究会
- 6.00 音楽教室「音楽のきき方」(2)下地晴一
「魚と鯛」安部玉治作
- 6.45 国民合唱「早起きお日様」
- 7.00 報道
みんな知ってゐる歌「からたちの花」外
岡慎子、東唱
物語「英三四郎」徳川夢声
8.40 農家の時間・蕎麦の増産と焼酎
農商技師原政司

8月3日 金曜

- 後 0.15 吹奏楽・長崎吹奏楽団
- 4.00 連続講談「水戸黄門記」(1)小金井麗州
- 6.00 少国民歌集・川田正子、坂田幸津枝、青
羽少国民合唱団、東管
朗読「藤原光の狂言へ」山田南
6.45 国民合唱「早起きお日様」
- 7.00 報道
勝礼、勝つれ、勝たせる礼・内村軍一外

8月4日 土曜

- 後 0.15 軍国歌謡「同期の唄」内田栄一外
- 4.00 連続講談「水戸黄門」(2)小金井麗州
- 6.00 音楽教室「音楽のきき方」(3)井上武士
童謡「鴉の鴉兵衛」室生犀星作
西山敏夫
- 6.45 「早起きお日様」
- 7.00 報道
今週の戦局
ヴァイオリン独奏「やさしき円舞曲」
近藤泉
放送劇「一つの罪」東京放送劇団

8月5日 日曜

- 前10.00 週間録音
- 後 0.15 「俗曲集」弘田龍太郎作曲・岡慎子外
- 1.00 陸軍燃料本部より中野の儀才「歌謡だよ
り」大空聖人、玉松太郎の演花節「普
通江戸引返し」木村松太郎の歌謡曲と
軽音楽・近江波郎、長門愛保、ノ音
- 4.00 管弦楽「牧歌夜曲」チャイコフスキー作
日暮
- 6.00 歌とお話「早起き朝顔」神近茂外
劇「勘太郎少年」(1)藤金四郎外
- 6.40 国民合唱「早起きお日様」西家文子
- 7.00 報道
落語「眠火事」桂文榮
邦楽放送音楽会①等と尺八「小川のほと
り」吉田晴風外の狂言「神しばり」三
宅幸九郎外②長唄「葛南ゆかた」神屋
六左衛門外

8月6日 月曜

- 後 0.15 合唱「荒城の月」佐々木成子、東唱
- 4.00 「万葉集」(1)森本浩吉
ピアノ独奏「スペイン舞臺曲」松隈陽子
シンボン
- 6.00 「地下の飛行機工場を訪ねて」萩原忠三
「勘太郎物語」(2)藤金四郎
- 6.45 国民合唱
- 7.00 連続講談「花菱及五郎」(1)神田山陽
怪談と俗曲・市丸、和田藤、外、
- 8.40 「秋の縁起と読書」黒川典高校長

夕焼けの丘

戦争の悲劇は二度と繰り返してはならない
後世の為に私は心から祈る

高宮 文恵

当時の住居は朝鮮平安北道の新義州でした。主人の勤務先は安東の満州電々
でしたので、鴨緑江を渡り、両方の税関の検閲を受けながら通勤してありまし
た。終戦の年の六月、奉天に転勤になり、小西区小西街の社宅に移り住みまし
た。その二ヶ月後に終戦になるとは思いもありませんでした。

戸惑い 昭和二十年八月

雑音で聞き取れないラジオの前に社宅の住人が集まる。玉音放送というが、
無知な私には玉音そのものが理解できず、思いは複雑だった。皆も怪訝そうな
表情だ。

敗戦。戦争に負けたっていうのはどういふことなのか。日本は負けないのだ、
日本は絶対勝てるのだと豪語していた軍部は何をしているのか、憤懣やるかた

ない気持ちだ。誰も負けたと信じない。又、負けたらどうなるのか誰もわからず、ただ啞然として動こうとしない。話すすべも見当らない状態だ。

そんな頃から時々爆竹の音が聞こえてきた。中国の爆竹は祝いごとの時に行うと聞いていたので、「一体何の祝いごとだろう」と、全く笑えない錯覚だ。

近所の主人は職場から早々に帰宅したのに、うちの主人はまだだ。氣をもんでいると、夕方薄暗くなる頃、みすばらしい姿で帰ってきたので胸をなでおろす。戦争に負けた実感がボチボチ表れてきた。途中が危険なので、わざとみすばらしくしたという。足元を見るとハダシだった。

そろそろ着くはずの荷物がまだだ。チツキ（奉天までのキップにあわせて決められた荷物だけ身体と一緒に届く）は届いたが……。局で調査したところ略奪で税関の倉庫には跡形もないとか。当時は不安と緊張の連続で、悲嘆にくれている間がない。

社宅前の奉天日赤病院の日本人全員脱出。松葉杖の人、タンカの人、医師、看護婦など、どこかへ去っていく。その後、八路軍が接收、それから軍人の出入りが激しくなる。

社宅の人達は「これは大変」とばかりうろたえ、それぞれがどこかへ避難し

た。ここへ来て日の浅い私たちは行くあてもない。奉天駅前に日本人街があることを聞き、大和町という処へ行く。何処ということもわからず、一軒の家に頼み込む。「軒先でいいですから、おいてください」と。台所は、その家人の済んだ後で使わせてもらう。鍋、茶碗、箸、米、味噌は持ってきたが、実情にない思いをした。夜には軒下の風呂敷の上に横になる。こんな思いをしているのに不思議と涙は出ない。

そんな頃から、中国独特の匂いが鼻につき、吐き氣に悩まされる。もちろん食事は全然だめで、「死んでもいいから家に帰りたい。そして、気兼ねなしにゆつくり休みたい」と主人に弱音をはき、二人で帰り支度をする。その家の人にお礼を言い、軒先を後にする。

辺りを警戒しながら雑然とした中国人街を通り、無事帰りつく。家に入ってビックリ仰天。畳、台所道具、電灯まで持っていてしまった。食事のとれない私はすべて諦め、板の間に横になる。（押入れのもの、タンスのものは残っていたので不幸中の幸いだった）

そんな頃、社宅の住人が帰ってくる。あまり近所の人達と話す機会もなかったが、こんな状態なのでなんとかこちらから話しかけてみる。みんな親切だ。

年配の人に私の異常がなんであるか聞いてみたところ、「それはきつと悪阻じゃないか」と言われる。悪阻と言われてもあまりピンとこず、ただこの不快感が治ったと思うのみで、これからの不安等全然考えなかった。病院はあつても、軍では何ともならない。ただ胸をおさえて寝ているだけだ。

お陰さまで主人は上司に普段の勤務状態がまじめだったとかで、通勤が許された。だから毎日出勤。同じ会社でも上司、仲間に嫌われていた住人は社宅を追い出され、中国人が入居する。何とも腹だたしいが、手も口も出せない。

床下にかくしておいた米を少しづつ炊いて食べるが、あの匂いの強烈さにまいてしまった。

だんだん敗戦に対する防備の手段を考えるようになる。

恐怖 昭和二十年八月末

夜、暴動略奪が始まる。爆竹の音が絶え間なく聞こえる。お互いの合図のためか、お祝いか、彼らにとっては略奪で日本人の物が手に入る喜びであつたのか。私たちが玉音放送を聞いて敗戦をようやく知った以前から、彼らは知っていたようだ。何台かの荷車を引く音、大勢の人の駆け走る足音、叫び声、銃声、街は騒然となる。

私は外の雑音を聞きながら、なすすべもなく横になっている。数発の銃弾が左右から撃ち込まれ、窓ガラスが破れる。泰然として横になっている私の心境は、自暴自棄、開きなおり、諦め、どの言葉も当てはまらない。ただ天命を待つのみ。天にお任せするより仕方がない。慌てふためいたところで何ができよう。主人は壁にへばりつき、事のすぎるのを待っていたようだ。本当に恐かったが、なすすべがないという状態だ。

戸外は中国人ばかりだ。日本人であるために迫害を受けることは必だ。中国人に向かって、「馬鹿」と言った子が銃で射たれたと聞く。負けたという事がこんなに悲惨なことなのかと、胸が痛むだけでなすすべがない口惜しさ。

デパートや日本人の店の焼き打ちが始まる。炎は天を焦がし、私は悄然と夜空を見上げる。花火のように火の粉が舞う。情けない気持ちと、「エーイ、なるようにしかならないワ」というふてくされた気持ちで家に入り、又横になる。私のすることは、胸いっぱいの不快感を抱え、横になるだけだ。

驚き 昭和二十年十月

おとなしそうな主人が社宅の人たちと一緒に暴動の仲間に入り、荷車に略奪品を乗せてきた。

・大豆油↓ドラム缶一本 ・トロロ昆布（下等品）↓大引出し一箱

・ほほ紅↓小引出しいっぱい

・チャンチュー（こおりゃん酒 45度強い）↓ドラム缶一本

私にとつては、喜ばしいものはない。ただ、チャンチューが吐き気を止めてくれ、二、三ヶ月続けて飲む（コップ一杯）。だんだん成長していくお腹の子は、酒で育ったようなもの。そのためか、長男は酒好きだ。はめをはずすことはないが、一升でもいける。だから母親である私も酒好きだ。

社宅を出てすぐの所を左に折れた一角に、八路軍の本部ができた。ある日、五、六人の軍人が銃剣を持って入ってきた。土足のまま室内に入り、一人が私の胸に銃剣を突き付け、床の間に押しやる。自分でそうしようとは思わないのに、両手が上に上がってしまう。他の軍人は部屋のあちこちを点検しはじめたが、めばしい物がない。隅にあった一番大切にしていたラジオを持っていたしまった。これで情報は断たれる。

日頃、周囲の中国人に親切にしてあげていたためか、社宅を襲うことはなかった。が、たまたま八路軍の名を語り、幼稚な工作をして私たちから金品を奪うことがあった。隣組で相談した結果、中国語の話せる松本さんと組長の主人が覚悟を決めて八路軍本部へ相談に出かける。毛沢東さんが烈火の如く怒ったそう。

その晩から数人の兵隊を夜毎社宅の周りに配置し、犯人つきとめのため警戒にあたってくれる。ある夜、犯人逮捕の連絡が入る。松本さんと主人が確認に出かけたところ、社宅前の食料品店の主人だったらしい。ひどい折檻を受け、傍で妻らしき人が泣いて詫びていた。あまり気の毒なので、「許してやって欲しい」と頼んだそう。

翌日、粗品を持って八路軍本部へお礼に行き、その晩からも軍によって警備されホッとする。数日して会食の招待を受け、男性だけが出かけた。だから、私は八路軍には感謝している。

買物へ行くときには軍本部の前を通って行つたのだが、二、三ヶ月した頃、突然なくなっており驚く。どこへ移つたのかは定かではないが、何となく心細くなってきた。

発疹チフスが蔓延する。一番お世話になった隣の奥さんが、明日もわからない命とのこと。大きなお腹を抱え、見舞いをかねてお別れに行く。シラミに埋まり、正視できない。何か言つたようだったが分からなかった。「お父ちゃん、

お父ちゃん」と呼んでいたようだ。ご主人から伝染したようだ。隣室のご主人は腰が抜けて歩けないため、黙って聞いているだけだ。お父さんのあぐらの中に、五、六歳の障害をもった男の子が座っていた。この子のことが心残りだったと思う。翌日、奥さんが亡くなられた。社宅の男達が木片を持ち寄り、ソリらしきものを作る。遺体を納め、雪の中をどこかへ運んでいく。

妊婦である私に伝染しなかったのは、奇跡としか思えない。神仏のご加護かと祈る気持ちでいっぱいだ。

不安 昭和二十年十二月

そろそろお腹の膨らみも目立ってきた。相変わらず吐き気は続くが、何をどのように準備してよいかわからない。今何ヶ月なのか、予定日はいつ頃なのか、順調なのか。たかをくくっていたが、とうとう不安にかられるようになる。

寒期に入る。三重になっている窓もびっしり霜がつき、外が見えない。氷点下20、30度ともなると、天井、壁、床は全部霜だ。石屑の中から拾い分けた僅かな石炭をペチ力に入れて燃やしてみたが、暖はとれず、一瞬でダメ。

そんな頃、主人が電気コンロと電気こたつを拾ってきてくれた。

・電気コンロ↓うずまきのニクロム線が所々切れている。(主人が修理)

・電気こたつ↓ニクロム線の巻いてある長さ10cmくらいの物体が二本並んでいるもの

宝物を手に入れたような気持ちだ。電気を入れると、ほのぼのと暖かい。嬉しかった。

電球が手に入らず、暗くなると寝るしかない。

寒さとの戦い 昭和二十年十二月

周囲が冷えすぎているためか、まともなご飯が炊けない。主人と考えた結果、玄関の下駄箱を部屋に持ってきて、試しにその中で炊いてみる。おいしいご飯が炊け、嬉しかった。幼稚な考えだったが、成功したことに二人で喜ぶ。

コンロの熱が弱く、炊き上がるのに時間がかかる。そして、炊ける間際のあの臭いがたまらない。口を押さえて別室に逃げこむ。米も少なくなり、こうりやんを混ぜる。異様な臭いだが出方がない。

水道を止められ、中国人街の一角にある井戸へ水をもらいに行く。その都度何か持っていかなければ水をくれない。物によって気に入らないとバケツに半分、気に入ると一杯いただける。私たちの持ち物は、一つづつ水に替わった。火鉢で燃やす木がなく、縁側の板を一枚づつはがし、灰と消えた。しまいには、

茶ダンスも同じ運命になる。やぶれ、かぶれの心境。

こたつは細々と私の体を暖めてくれる。主人の思いやりが暖かさを倍にしてくれた。

凍った野菜を包丁の柄でたたき割り、氷の固まりを入れるように鍋に入れる。野菜といっても、すの入った名前だけのもの。少ない水なのであまりきれいに洗えない。少々ゴミなど何とも思わない。おいしい、まずいなど言つてはおれない。お腹に入ればいいのだ。食べられるだけでもいいと思わなくてはならない。

準備

僅かな荷物の中からあれこれ出し、母となるための準備に入る。チツキの中には当座の物しか入っていない。まさか子どもができるとは思ひもよらないことなので、とにかくある物で何かしなくてはならないと、ない頭をつかう。

主人が離したことがない毛糸の腹巻を脱いでもいい、ほどこいておくるみを作る。燈火管制の時使っていた厚手の黒赤の布で、おむつを作る。私の下着で、襦袢を作る。

ちようどそんな頃、たまたま阿出川さん宅の生まれたばかりの赤ちゃんが、

栄養失調で亡くなった。その赤ちゃんの遺品をそっくり頂戴した。申し訳ないような複雑な気持ちだったが、その子のためにも丈夫に育てなくてはと思う。その赤ちゃんは凍りついた土に埋められず、みかん箱に納め、春の雪解けまで押入れにおいてあると聞き涙が出る。

自分の育った頃を想いだし、いろいろ工夫する。日本へ帰るといふ希望より、無事産むことのみで頭がいっぱいだったようだ。混乱のなかでささやかではあるが、夢がもてた。後で聞いて知ったのだが、この頃から胎動らしき感があつた。無知な私は、この動きはなんだろう位にしか考えていなかった。

一つづつ妙なものではあつたが出来上がった。チツキの時に使ったトランクに詰め、出したり入れたり、これでいいかと心配したりで、そんな毎日だった。ある日、軍人が一人土足で入ってきて私を追い掛け回した。私は部屋の中を逃げ回った。逃げながら「私はお腹が大きいから」と身振りで教えた。当時、強姦の話をたくさん耳にしていたので、つきり私もその一人にされるかと思つたが、早とちりだった。洗濯をしてくれということだったらしく、相手も身振り手振りで洗濯の動作をして初めてわかった。市街戦で軍服が血で染まり、所々破れていた。翌日、破れた処につきを当て、きれいにして渡したところ、

お礼に石けんをたくさんおいていつてくれた。

出産 昭和二十年十二月二十一年五月

まず心配になったことは助産婦さんのことだ。人づてで楡木さんという方がいることを耳にし、捜しに行く。中国人街をいくつも通り、ようやく見つけた。屋根裏から中国服の女性が下りてきた。てっきり中国人かと思ったら、日本人で一安心。お腹の様子では五月頃だろうとのこと、胎動の話もその時知った。楡木さんが翌日私の家に来てくださり、準備を見て褒めてくださる。粗末なものばかりだったが、一応揃っていたようだ。気配があつたらすぐ報せるようにと言われて、その晩は泊まってくくださった。拝みたいくらいに嬉しかった。案の定、五月五日朝から調子がおかしく、昼頃黒木さんに走ってもらおう。産気づいてから四く五時間、一本のローソクを頼りに、皆の励ましを受け、十時四十五分やっと身二つになれた。

楡木さんはその晩泊まってくくださり、何くれとなくお世話してくくださった。

社宅の奥さん方、黒木さん、本田さん、渡辺さん、松本さん等々、皆いい人ばかりで心からお礼を言う。

隣組の会合から帰った主人は、私の横の我が子を不思議そうに見ているだけ

で、何も言わない。今後のことを考えていたようだ。果たして内地へ帰れるのか、帰れないのか、不安が新たにつのるばかりだ。

黒木さんが毎日、私の看護、赤ちゃんのオムツ洗い、他の洗濯に通ってくださる。その方とは今も文通し、お互いの安否を確認しあっている。

長男 昭和二十一年五月五日 午後十時四十五分 出生

命名 高 宮 節 治

社宅を出された河内さん（奥さんが亡くなられた方）に私の家に来てもらう。大変喜んでくださった。

子どもの名前はこの方につけていただく。節句に生まれたので「節」、明治の「治」は縁起がいいそうだ。

布団が薄くてかわいそうだと言って、河内さんの厚手の布団に寝かせてくださった。感謝していたが、二く三日して中国人に売ったからと私のうすつぺらな布団に移し換え、中国人に渡してしまった。

育つ 昭和二十一年五月

母乳がよく出て、そろそろ見よくなってきた。夜中、突然節治が泣き、目を覚ます。ローソクに火をつけて見たら、大きなネズミのしつぽが消えるところ

だった。急いであちこち見廻すと、左の手から血が流れている。よく見ると、四ヶ所噛んだ痕が見つかる。

夜明けを待つて、奉天駅近くにある仮設病院まで、雪の中を走る。首がすわっていないので、こわれないように抱いていく。必死だ。

「今晚一晚様子を見ましよう。ペストだと噛んだところから変色してくる。そうなたらすく来るように。六〇六号を打ちましよう」と言つて、治療をしてくださる。小さな手が隠れて見えなくらい、厚く包帯をしてくれた。痛ましい。「乳の匂いがするから注意するように」と言われた。お陰さまで何ともなかった。ホッと胸をなでおろす。

社宅の一軒に入っている中国人の婦人が来た。「私たちには子どもがいない。日本へつれて帰るつもりか。それは可哀相だ。途中で死ぬに決まっている。大切に育ててあげるから、是非欲しい」と言つた。私は即座に断つた。

買物から帰ると、寝かせておいた我が子がいらない。留守の間につれだしたらしい。家が分かつていたので、その家にとんでいく。「返して欲しい」と言つても、中から鍵をかけ、入れてくれない。とうとう私は、恥も外聞もなく、泣きだしてしまった。家にとつて返し、今着ている服以外のめぼしい物をかき集

め、風呂敷に包んだ。それを持つていき、泣いて頼んだ。物につられたのか、母親の情が分かつたのか、やつと返してくれた。あの時の悲しみは、今こうしていてもわすれられない。あのまま置いてきたら、残留孤児になっていたに違いない。

それからは何処へ行くにも連れていった。首がすわっていないのでタオルのような布で頭をささえ、私の胸にしばらくつけ、安定させて歩いた。子どもをくつつけていることで私は安心できた。

引き揚げ 昭和二十一年五月中旬

そろそろ引き揚げの話が出始める。お産の後、十日たった頃から準備にとりかかる。

まず、この子をどうやって連れて帰るかが心配だった。考えた末、布団袋を解く。節治の身体の大きさを測り、二重にして袋を作る。その四隅に紐をつけ何回も試してみる。さしあたりこれでいいようだ。いつ内地につくか分からない。ありつたけの物を用意し、袋に入れたり、出したりの毎日だ。

ある日、主人が帰宅して食事の時、「今日幹部からソ連のモスクワへ来てくれないかと言われた。電気技術者が欲しいとのことで、待遇はいいそうだ」と

言った。私は内地へ帰りたいばかりで、そんな話にのれる筈もなく断った。ソ連と聞いただけで、身震いする。

帰国についての書類も揃い、主人が仕事の合間に手続きをしてくれた。節治の入籍も済んだ。

満州国遼寧省遼寧市小西区小西街二段二三九号

瀋陽日僑本部戸籍係に届ける。

《この戸籍のせいで節治が一年生に入学して間もなく、学校から泣いて帰ってきた。理由を聞いたところ、クラスの皆が中国人だと言った。担任が言わなければ知るはずもないと思っただが、騒ぎたてることもないので子どもによく言っただけさせた。そのためか学校を嫌い、登校拒否を起こした。毎朝困ったが、ようやく友達ができ、先生の協力を得て学校へ行くようになる。》

帰国

六月二十九日、帰国の途につく。三百数人の列が動きだす。

午前七時、東北保安司令長官の指令により、北奉天駅に向かう。身体検査、手荷物検査等をして、延々午後九時まで待つ。曇っていた日なので、夜の九時ともなれば相手の顔すら見えない。胸にくっついていてる子はおとなしく、いつ

も眠っていた。両手の荷物は本当は重かっただろうが、苦にならない。主人もリュックを背負い、両手に荷物だ。

無蓋（屋根のない）貨車が入ってくる。止まるか止まらないうちに、三百人の列が崩れ、気が狂ったように車内へなだれ込む。といっても、入り口がなく箱型で高さが二米くらいあり、すぐには乗り込めない。

主人が荷物をまず投げ入れる。そして私を乗せようとするが。胸の子をかばったりしているうちに、他の人が乗り込むので、押され押されてどうにか乗れた。人の助けもあったと思うが、無我夢中で主人がどこかも分からなかった。「とにかく乗れたんだ」という安堵感と疲れで、誰のか分からない荷物に腰をかけて泣いてしまった。主人が荷物をやとと捜してくれた。

汽車が動き出す。夜が明けた頃、雨が振り出す。私たちにはたいした物もなく、濡れるにまかせていた。私は子どもの上にかぶさり、傘がわり。大きな力ツバをかぶって雨を避けていた隣の人は、まだ大分余裕があるようだったが、「入れ」とは言ってくれなかった。

七月八日午後一時、例の貨物列車に乗り、二時に出発。途中でトイレ休憩のため停車。車内は箱型なので外の景色は見えないが、数人の男性の助けを借り

て初めて周囲の様子を見て驚いた。延々と続く草原の中、木一本ない殺風景なところだ。私は汽車のすぐ傍で用を足した。数人の女の人は恥ずかしいと思うのか、大分離れたところまで行った人がある。そのうち発車の合図がある。十五輛以上と思うが、遠くへ行った人たちは乗車に間に合わず、残されたようだ。「おい、いいのか、どうするんだ」と互いに気を揉むだけで、箱汽車の悲しさをすべがない。草原に残された数人の人たちの、助けを求めて泣き叫ぶ声だけが汽車の音に消されていく。

日本に帰る喜びはどこかへふつとんでしまい、あの声だけが今だに耳に残る。あの時残された人たちのことが、五十年たった今も案じられる。

胡蘆島で下車。バラックの宿舎に入る。何とか無事に抱いてこれた我が子を見てホツとする。

遠くに見える夕焼けに染まった丘の上に、いくつもの棒のようなものが見える。「途中で亡くなった老人や赤ちゃんの墓だ」と人に聞く。仲間にならなくてよかったと思う。宿舎の横を鉆を持った数人と、ベビー服を着せられた赤ちゃんを抱いている父親らしき人の姿が、夕焼けの丘のほうに消えていった。

悲しい。実に悲しい。

乗船

荷物検査。金品や腕時計、万年筆等、めぼしい物はみんなとられてしまう。

DDT消毒で皆頭からまっ白。やられるままだ。

乗船して二日目頃、海が荒れ、皆酔って吐く人続出。

食事はコーリャンのおにぎり一個が食べられず、大切にしまつてある。私は子どもに授乳しなければという気があるためか、吐くこともなく、もつと欲しくらいだ。だが、おにぎりに糸がひくようになって、誰もくれようとはしない。お腹が空き、皆にもらつて歩いた。おむつも残り少なくなってきたのであるべく使わないように、お尻は出しっぱなしにしておいた。その点男の子は助かる。

船底にむしろを敷き、三百数人の人がうごめいている。若い頃見た映画の奴隷船のシーンを思い出す。甲板に出るにはなわばしごを使い、時々人が降ってくる。

七月十三日 夜明け。甲板から「日本が見えたぞー」の声に、船底は一斉にざわつく。我先になわばしごをかけ上がる。

私も子どもを胸に抱き、一番後から上がる。遠く藁屋根の家の灯りが点々と

見えたときの感動は、忘れることができない。感動のあまり亡くなったお年寄りがいた。その息子さんが何処へ行くにもおんぶしていた姿を見ていた。本当に残念だが、日本を見て逝けただけでも救われる。

上陸

山口県仙崎港へ入港。船内で予防注射をし、無事上陸。その時いただいた粉ミルクのおいしかったこと、日本へ帰ってくることでできてよかったとつくづく思った。

思い出の品

腕章にはこう書いてある。

東北保安司令長官司令部日僑俘管理處

瀋陽市日僑俘管理所 真ん中にデンとソ連の印が押してある

保僑字 一二六三八四號 中華人民国三十五年六月二十日

第一一四大隊 第五中隊 第一小隊

色あせた思い出の品を出し、当時を思い起こしております。

《特別掲載》

この話は平成九年七月十九日に開催した、「第九回 戦争体験を語り継ぐ集い」で、沢田先生が子ども達に語られた内容です。

「早く逃げなさい」

「ごめんなさい、お母さん」

沢田 昭二

広島で原爆にあった時の話をします。

その時、私は中学校二年生でした。中学生でも、もう戦争のために工場などへ動員されて仕事をしていました。私は工場で機関銃の弾を作る訓練を受けていました。

前日、食事で大豆をボリボリと食べていましたが、お腹をこわしてしまいました。そのため、翌日は工場を休んで、家で寝ていました。

寝ていたから何がおこったのか分からないのだけれど、気が付いたら壊れた家の下敷きになっていました。普通、地震だと揺れているときに、外へ逃げることもできるのだけれど、あつという間の出来事だったのです。

広島では原爆のことを、「ピカドン」と言います。何故かといいますと、最初にピカツと光り、光と一緒に熱がやってくるからです。広島がその熱で火がつけました。その後、「ドン」というすごい爆風がやってきたのです。鉄筋コンクリートのビルも壊れるほどのすごい風がきたのです。広島はペシヤンコになってしまいました。

私は「ピカ」も「ドン」も知らないのです。家の下敷きになっていたのだから。

それで、もがいているうちに隙間ができて、やっと外へ這い出すことができました。外を見ると真っ暗闇でした。朝の八時十五分に原爆が落ちたのですから、明るいはずなのに真っ暗闇でした。広島中がペシヤンコになったのです。物すごい土ほこりがたち、それが舞い上がって、太陽の光をさえぎり、暗闇になったわけです。始めはこげ茶色に見えたのが、だんだん茶色、そして白っぽくなり、広島全体が見えるようになってきました。

住んでいるところは家がびっしり建っていて、二階に上がってもよその家の屋根しか見えないところでしたが、見渡すかぎりペシヤンコになった広島が見えたのです。

それでこんなに大きな街が被害を受けたのは、きっと地震が起きたのだと思つたのです。原子爆弾だとは夢にも思いません。大きな爆弾だって、広島をペシヤンコにするなんて想像もつきませんでしたから、大きな地震に違いないと思つたのです。

そう思っている時に、足元から私の名前を呼ぶお母さんの声が聞こえました。私の名前「昭二、昭二」と呼ぶ声が。声ははっきりはしていますが、すごく遠くから聞こえてくるのです。壊れた屋根や柱や壁などの隙間をすり抜けて、私の耳に届いたのです。それで、お母さんといろいろな話をしました。

「これは大きな爆弾だ。家のすぐ近くに落ちたんだ」と言いました。

でも、原爆に遭った人達は、自分の近くに落ちたんだと思つていなのです。たった一発の爆弾が、広島の上空五百八十メートルで爆発し、広島を全滅させたのですから。私のお母さんも大きな爆弾だと思って私に教えてくれたのです。それから、上に乗っている柱などを取り除けようと一生懸命になりましたが、動かすことができません。逃げてくる人に、「お母さんが下にいるので、助けてください」と頼みました。手伝ってくれるのですが、結局だめで逃げていってしまいました。

始め気がつかなかったのですが、「ピカッ」と光った時に、火がついてしまったのです。しばらくくすぶっていました、やがて燃え始めると、炎が次第に広がってきました。

それをお母さんに言うと、「すぐに逃げろ」と言うに決まっているので、始めは言わなかったのですが、だんだん火の手が強くなってきたので、ついにお母さんに言いました。

「おまえだけは助かって、早く逃げなさい」と、言ったのです。

一生懸命助けようといろいろなことをやってみたのですが、火が近くまで迫ってきました。お母さんは非常に怒るような口調で、「今すぐ逃げなさい。おまえは生き残って、しっかり勉強してりっぱな人間になりなさい」と一生懸命私を説得しました。

火事あらしというぐらい火が強くなってきたので、これは仕方がないと思い、最後に「ごめんなさい、お母さん」と言って、そこを逃げました。

三日後にそこへ行ってみました。お母さんのいたであろう場所の焼け跡を掘ってみました。まだ底のほうは火が残っていました。私はお母さんの骨を骨壺に入れて、持って帰りました。

私は今物理の勉強をしています。物理の原理を使うと、小さな原爆でも爆発すると、一瞬に広島のような大きな街を焼け野原にしてしまいます。また、熱線による火傷で、ケロイドみたいになってしまうのです。

でも、もっと恐ろしいのは放射能です。火傷をしていない、怪我もしていないと安心していている人たちに、一週間すぎた頃から、髪の毛が抜ける、歯茎から血が出る、皮膚の表面に斑点が出るなどの症状が現れます。放射線による原爆症で、苦しんで苦しんで、一ヶ月くらい後に多くの方が亡くなっています。特に高齢者よりも、若い人、子供、お腹の子供に影響が強く、今でもいろいろな形で続いています。また、ガンにもなりやすいと言われています。

二十一世紀に大人になっていく皆さんに、この恐ろしい体験を伝え、世界中で戦争や核兵器を無くそうと取り組んでいます。

※ この話をもとに、実行委員会の皆さんと住民の協力により、次頁の歌

「ごめんなさい、お母さん」が作られました。

戦争の悲惨さ、平和の大切さ、命の貴さを考えながら、広く皆さんに歌い続けられていくことを願っています。

戦争体験の歌

《ごめんなさいお母さん》

作詞 実行委員会
作曲 坂手 尚子



1 げん ば く が お ち て
2 あ か い — お ほ ち の お
3 か あ さん の ほ と と ば

ち い ろ の あ ら し の な かる
わ が や が な も い あ の こ と ば

か あ さん は い つ た
わ あ し は い き き ぶ る

は や く に げ よ と と
つ や く に の き も と と

二、赤い炎

我が家が燃える燃える

かあさんが叫ぶ

強く生きよと

親子を引き裂く

悲しい戦争

語り継ごうよ

生き続けよう

三、

かあさんの言葉
忘れないあの言葉

私は生きる

世界の友と

科学の力を

平和のために

語り継ごうよ

生き続けよう



お や こ を ひ き さ く
お や こ を ひ き さ く
お や こ を ひ き さ く

い っ し ん の く も う
か ない し わ の せ た そ め に

1~3同じ た り つ ご う よ

1~3同じ い き つ づ け よ う

《ごめんなさい

おかあさん》

(子どもたちと

歌いたいうた・歌詞)

一、

原爆が落ちて

茶色の嵐の中

かあさんは言った

早く逃げよと

親子を引き裂く

一瞬の雲

語り継ごうよ

生き続けよう

《編集後記》

今の日本は平和です。しかし、私たちの「人権」は本当に大切にされていますか？安心して暮らしていますか？

戦後五十余年を歩み「平和のベール」で包み込まれた日本の生活を、じっと瞳を凝らしてみると「労働」「福祉」「教育」など、様々な場面で「人を大切にしているのか？」疑問が見えます。

「戦争・高度経済成長・バブル崩壊」と激変の日本を支えてこられた方々の体験や思いを心に刻み、私たちはどんな社会で暮らしていきたいのか、そのためには・・・と考えさせられます。

「記録集」作成にあたり、重いペンを取り「体験記」をお寄せ下さいました方々、ご協力いただきました方々に心よりお礼申し上げます。

編集者 一同

緑区民の戦時体験記録集 (第五集)

編集 「第十回戦争体験を語り継ぐ集い」実行委員会

発行・印刷 名古屋市緑生涯学習センター

発行年月日 平成十年七月十一日